

しかし、そんな中で、豊助を信じていたのは妻のれんでした。れんは何もことばには出しませんが、冷たい世間の人の目の中で、豊助と共にじつとがまんしているのです。豊助には、それがかえってつらく、すまない思いでいっぱいでした。

「すべて私が悪かったのだ。すまない。れんにも、殿様や頼母様にも。いや藩の信頼をなくし、農民の期待を裏切ってしまった。この責任は私にある。」だから、死んでおわびをしなければならぬ、という覚悟をきめて、豊助は西郷頼母のやしきをたずねました。事故のようすを報告しないうちは死ねないと思つたのです。

報告を聞き終わった頼母は、

「死ぬことはならぬ。」

ぼつんと言って目をつむりました。春の日ざしがさつと座敷いっばいにさしこ